The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山東京伝序「江戸風俗図巻」をめぐる諸問題
Author(s)	安井, 雅恵
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44111
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【29】

氏　　名	安井雅恵（やすい まさえ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　17471　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	**山東京伝序「江戸風俗図巻」をめぐる諸問題**
論文審査委員	（主査） 教　授　奥平　俊六 （副査） 教授（総合学術博物館館長）　肥塚　隆　　助教授　藤岡　穣

論文内容の要旨

本論文は、江戸後期の戯作者山東京伝の序を持つ極彩色の人物風俗絵巻「江戸風俗図巻」をめぐって、描かれた人物の「類型」の描写について考察しながら、喜多川歌麿、山東京伝、初世歌川豊国の人物描写の本質を、絵画、文芸、芸能の関連の中で解き明かそうとしたものである。

序、第Ⅰ部「歌麿美人画試論」、第Ⅱ部「山東京伝序江戸風俗図巻をめぐる諸問題」、結びにかえて、および資料1～5、さらに図版編（別冊）からなり、本文は400字詰めに換算して約300枚、図版は167枚である。

第Ⅰ部の第一章「歌麿美人画と京伝『客衆肝照子』」では、歌麿の「婦人相学十躰」と「婦女人相十品」の両シリーズの成り立ちを考察し、「婦人相学十躰」の「面白キ相」と「浮気之相」が最初に描かれたこと、そしてそれが京伝の洒落本『客衆肝照子』の挿図に直接的な淵源を求められるものであることを指摘し、その意味について考察する。

第二章「酔う女たち」では、第一章を受けて歌麿美人画に頻出する酩酊表現を分析し、その意味について考察する。

第Ⅱ部は論文題目ともなっている「江戸風俗図巻」の考察である。この作品は、従来序文と画中の詞書きの筆者である京伝自身の肉筆画の代表作とされてきたのだが、第一章「筆者の問題」において、京伝の画業を徹底的に分析し、それを否定し、さらに広く同時代作品と比較した上で、筆者を初世歌川豊国に同定している。

第二章「通人のかたち」では、主として描かれた「通人」の描写を分析し、芝居絵の「助六」の表現との異同を論じつつ、「通」という概念が時代によって変化していくさまを考察している。第三章「美人の描き分け」では、「江戸風俗図巻」に描かれた女性の表現をもとに、その描き分けの意味を問いながら、歌麿から豊国への影響を明らかにする。

論文審査の結果の要旨

先行する版本挿絵からの図様の借用は浮世絵においてはしばしばあることであり、歌麿における『客衆肝照子』からの借用は、それだけであれば一つの原画の発見に過ぎない。しかし、本論文では、これを歌麿自身の重政絵本からの図様借用の例と比較して、これが単に人物のかたちを写したのではなく、そこに込められた「うがち」の視線に注目して取り入れている点に考えを及ぼしていることが重要である。『客衆肝照子』の趣向が、もともと「うがち」の

芸である浮世物真似と深い関係にあることを指摘して、歌麿の最大の魅力であるスナップショット的な表現の源を明らかにした点が高く評価される。

また、戯作者として活躍する以前には浮世絵師北尾政演として活動していた京伝の画業全体（資料３「政演期の錦絵リスト」資料４「京伝落款肉筆画リスト」は労作）を見通して論を立てたこと、そして「江戸風俗図巻」の筆者を新たに豊国に比定したことは画期的な成果であり、さらにその考察の途上で、従来京伝作とされてきた複数作品について北斎筆であることを証明している点も見逃せない。作品比較の精密さは特筆に価する。検討対象とした浮世絵、黄表紙、洒落本、滑稽本が膨大な数量であること、そして参照した論考が美術史、国文学、芸能史に広く及んでいることは、充実した資料と注により明かである。

一方で、論文全体としては、第Ⅰ部および第Ⅱ部第一章とその後の章の完成度がやや違うことが気になる。「江戸風俗図巻」の考察を通して、歌麿、京伝、豊国を結ぶ広い円環を見せながら、そこに時代の空気のようなものを浮かび上がらせようとした意図は十分に伝わるが、その企画が広壮であるが故に精度の高低があらわになってしまったことが惜しまれる。また、豊国邸で三馬が落とし噺（落語）を聞く話、あるいは席画を用いた咄の会のことなど重要な資料を見出しながら、決定的な資料がないが故に、豊国が描いた十四五年後に京伝が序と詞書きを加えたという「江戸風俗図巻」の不思議な成り立ちについて、発注者や制作状況に関わる結論が得られなかったことも残念である。

しかしながら、本論文は、「江戸風俗図巻」の一点研究として小さくまとまることを拒否して、そこに見られる人物の「類型」の考察から、寛政期の絵画、文芸、芸能の関係を明らかにしようとしたことが実に意欲的であり、新知見も豊富に含まれている点でも、高く評価すべき内容であることにかわりはない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと考える。